銅鑼造りの名工・魚住為楽

〔Ⅱ〕

木　村　弘　道

略　歴　二

銅鑼師魚住安太郎は昭和13年10月正木直彦の依頼により，法隆寺夢殿の救世観世音菩薩を安置する厨子の修理の木地仕上げに従事することになった。それは安太郎にとって思い出も多く，また安太郎の生涯を前期と後期に区切る事件であった。

安太郎がこの修理に加わる様になったいきさつについて安太郎自身『魚住為楽ききがき抄』で『1尺8寸のドラを完成した翌年の昭和13年のことだった。芸術院の正木先生が金沢へおいでになって「法隆寺の夢殿を修理したいのだが，ヤリカンナを使う者がいなくて困っている」と話された。

そこにあった板きれに，かしゃかしゃとヤリカンナでいたずらをして「これですか？先生」とお見せすると，びっくりされ「そうだ。魚住だ。お前ならやれる。ぜひやってくれ」と頼まれた』と云っている。

そして，さらに当時の思い出を次のように語っている。

〔奈良県法隆寺の夢殿の大修理のうち救世観世音菩薩を安置する厨子の木地仕上げをやってほしいとのことだった。正木先生のことゆえ，いやはいえなかったが，その仕事たるやただの仕事ではなかった。

この厨子の仕上げが天平時代そのままのヤリカンナを使ってやらねばならない。当時ヤリカンナを駆使できる人は数少ないものだった。わたしは若いころ，家業の桶屋の職人の見よう見まねでヤリカンナの使い方を覚え，父の片腕として得意になって使っていた。

正木先生は厨子のとびら8枚をやってくれとのこと，10月はじめ，やりかけの仕事を全部中止して法隆寺へむかった。52歳だった。

何事にも仏のお力とお導きを思うわたしにとっては，この修理事業に参加するのも，仏のお導きであると信じ，一心に仕事に打ち込んでいった。

ところが，同じ修理のため全国各地から雇われてきている他のだいくたちは，名もないわたしが，選ばれて，ひよっこり作業に加わったのをみて，白眼視しはじめ，何かにつけて意地悪くあたった。

その意地悪はある日，とうとう爆発した。

「おい，魚住，君は法隆寺の修理に選ばれるくらいだから，ずいぶん達者な腕をもっているのだろう。一度おれたちにその腕のほどを見せてくれ。目かくしをして，1寸角の古材の1尺の間をチョウナ（手斧）で10にきざみその1寸の中を10きざみにしろ。5厘までの誤差は許してやる」というのだ。

無謀な話である。しかし，ここでことわれば彼らには，生涯頭があがらないのだ―と思うと，もちまえのわたしの負けずぎらいが“なにくそっ”と頭をもたげてくる。

「ヤリカンナは使えてもチョウナは使えぬだろう。ひとつみんなで冷笑してやろう」という彼らの魂たんが，わかればわかるほどわたしは「おう」と即座に承知したのだった。

だいくのひとりが，背後から手ぬぐいで堅く目かくしをした。仏の名を念じながら，絶対の自信をもってわたしはチョウナを振った。

さて―目かくしをといてみるとどうだろう。2小間だけ，きざみ目に狂いがあったが8小間はみごとに正確にきざみつけられていた！。あまりのうれしさに，どっと涙がでて，一心に仏を念ずる

ばかりだった。だいくたちは「ほう」といったまま立ちつくす。

そこで，わたしは，このまま引きさがっては意地が立たない。逆に彼らにいった。

「幅4寸，厚さ2寸のヒノキの古材をまさかりで5厘から1分までの厚さに削ってくれ」

しかし，だれひとり名乗り出るものはない。そこで，わたしはまさかりをとって1分以下の厚さに削りあげてみせた。これで彼らは完全にわたしに頭をさげ，今までの無礼をわびてきた。

それからというもの，毎日の仕事が楽になり，心のまま，厨子のとびら8枚を仕上げたが，法隆寺貫主佐伯定胤氏はじめ文部省技官に頼まれ，厨子内全部のヤリカンナの仕上げに全力をあげた。〕

しかし，上記の話は『十三松堂日記』には見あたらず，正木直彦がいつ安太郎のヤリカンナの腕を知ったのか正確な年月はわからない。ところが『十三松堂日記』の昭和13年10月1日に突然「…今日奈良なる岸熊吉氏より法隆寺夢殿厨子工作追々進みたるにより鑓炮工の至急派遣の事を申来れるにより魚住安太郎氏に至急法隆寺に出向すへきやう申遣す　支度料を送金したり」また同年11月8日の日記に「午前8時半大阪着　夫より10時に法隆寺に行き佐伯和上　岸技師　今井　魚住安太郎に会して夢殿厨子製作の打合を為し続て現場にて鑓炮の工作を見る…」と書いてある。

また，魚住家に当時の新聞の切抜きがあり，「木地は鏨造一法隆寺救世観音の厨子」という見出しで「法隆寺東院夢殿に安置の救世観音立像の現在の厨子は徳川元禄期に当時の信仰者多数の寄進によって作られたものであるが，あまりに通俗的なので元美術学校長正木直彦氏が発願して広く浄財を集めいよいよ千古の秘仏を安置するにふさはしい厨子を作製することになりすでに模型も出来上り法隆寺修理事務所ではその監督にあたり着々大講堂古材をもって木地工事にかかってゐるが厨子の高さは14尺，8角宝珠形4扉総漆塗りのもので木地は全部鏨造りとなし正木氏の推挙によりわざわざ金沢より鏨師の名人の折紙付きである魚住安太郎氏が来隆して腕を揮ひ現代に珍らしい用法の鏨を使い木組の仕上げを行っている」との記事がある。

なお，法隆寺で生活中の如何にも安太郎らしいエピソードが『魚住為楽ききがき抄』に出ているのでついでに紹介しよう。

『法隆寺へきてから，丸2年半，最初，仕事にかかったとき「完成するまでは1歩も寺の外へは出ない」と自分に誓ったとおり，2年半というもの，かんなくずにまみれ，仏の名を念じつづけ，寺領の外へは1歩も出なかった。…といいたいところだが，わたしも凡人にぎやかなことが好きなわたしには，さびしくてたまらぬ日もあった。さいわい，わたしにはどこへでもついてくるものがおってねえ…（？）ある日，寺近くの芸者が酒をもって訪れてきてくれた。年増だが，近辺ではハバをきかせた芸達者だ。1升だるをさげてしのんできてくれたが，昼間，こちらは仕事中。めしたき婆さんには，そでの下を包んだが，人目がうるさい。「仕事があがるまですまんが押し入れに」としばしば，しのんでいてもらった。そのあとは話すまでもないだろう。寺を出るときはへやの中が酒だるか酒だるのへやかわからんようになっていたことは事実だ。』と思い出を語っている。

この話の内容は如何にも安太郎らしいが，ここに丸2年半云々とあるのは，何かの話と混同したのであろう。昭和14年7月28日付の『石川読売』には「法隆寺国宝修理異変」という見出しで次の記事が出ている。

「一介の桶屋稼業から身を工芸界に投じて辛苦粒々の30年間，遂に工芸王国石川の金工界に独自の境地を築き上げ，特に幽幻の響鳴を貴ぶ『銅鑼』の製作にかけては天下一品の名声を獲得してゐる金沢市長町5番丁工芸家魚住安太郎（54）氏は，昨秋日本工芸界の最高権威である帝国美術院顧問正木直彦翁にその名工気質を買はれて畑違ひの国宝奈良法隆寺修理にその重要な一役を依嘱され全国工芸界の権威者達に伍して生命を賭した夢殿の秘仏救世観音像の厨子を完成，この程数々の感激的エピソードを抱いて7ケ月振りに懐しの我が家へ帰った」とあり，『十三松堂日記』の昭和14年10月19日に「…今朝未明より魚住安太郎金沢より自転車にて湯涌に来り夫より医王山の前山に上りて霞網を掛けてつぐみを猟し午前9時ころ獲物を携へてホテルに来り夫より自ら料理して余

等に享せんとするなり正午玉泉湖畔の小亭に於てつぐみを炙りなから松茸を焼きながら酒も媛めて皆打寄りホテルの支配人なども接待しておもしろきピクニックなりき…」とある。

以上の新聞や『十三松堂日記』の記事を総合してみると『魚住為楽ききがき抄』の２年半云々は誤りで，安太郎が法隆寺で厨子の修理に携わっていたのは，最も長く日数をとっても昭和13年10月より昭和14年７月の10ヶ月ということになる。

安太郎にとって，この思い出の多い法隆寺夢殿の本尊の厨子修理にまつわる話を『魚住為楽ききがき抄』は最後に「余談になるが，修理前の夢殿の材料は余人には渡さず焼き捨てることになっているのだが，わたしは佐伯貫主に頼みこんでいくばくかの竹をもらいうけ，茶しゃくと筒を作って佐伯貫主をはじめ恩のある方々に贈ったものだ。」と結んでいるが，当時の新聞には次の様な記事が出ている。

すなわち，昭和14年7月28日付の『石川読売』は「役立った桶屋の秘伝　畑違の名工に凱歌　見事に出来上った大厨子」の見出しで『奈良法隆寺の夢殿は百円紙幣の表面聖徳太子像の下方に印刷されている飛鳥天平時代建造物の極致であり，今なお千古の工芸美を讃える崇厳さであるが，比の内部に奉安されてゐる救世観音は聖徳太子の尊顔を刻んだものとして尊崇の餘り１千年来白布で覆ひ隠されていた等身大の秘仏である，而して此の尊像を納める１丈5尺8角形の大厨子は徳川初期建造にかかり腐朽甚だしいものがあったので元帝国美術院長の正木翁が終生の大事業として修理寄進方を発願し法隆寺修理の主要部分の一つとして担任すべき名工を全国から物色したが，古代建造物の常として槍鉋が使用されてあるため近代的工具に慣れた工芸家中からは適任者を見出すことが出来ず，遂に魚住氏の少年時代に修練した桶屋稼業の木工技術と一念凝った制作慾に燃える名工気質が買はれたもので塗工作には現美校助教授松田権六氏(金沢市大桑町出身)が担任，ここに工芸石川を誇るべき郷土２作家の名コンビのもとに伝統の厨子建造が着工され，千古の寂びある夢殿の風雅な建造美との釣り合ひなどに工芸の極致を往くものの荊棘の苦悶を見事突破して遂に６月中旬，高さ１丈５尺，横８尺５寸８角形の古代に変らぬ大厨子を法隆寺大講堂の古代檜材で完成し，将来永久に残る現佐伯法隆寺管長筆の建造由縁書板額をその天井内部真束に掲げて感激の凱歌を奏したのであるが，７ケ月振りの帰宅に当って同氏はこれも１千年前建造の伝法堂壁に使用してあった古代竹材で制作した「茶杓」に，正木翁と佐伯管長が「伊可流我」と命名箱書してその労苦に酬ひ，茶人垂涎の名作土産として地方工芸界の羨望の的となっているが，奇骨隆々の名人気質魚住氏は「私如きが全国一流の工芸家に交って光栄の法隆寺修理に加わることが出来をのは一つに正木先生のお蔭です，私は金工畑ですがしかし少年時代の小松町で３代続いた桶屋稼業の経験と一切の芸術境に共通な制作慾から無事に，しかも自分の思った通りにやって来ましたが塗の方の松田先生も加賀人であり，百万石工芸の伝統的名誉のために生命を賭してやり遂げたのは愉快であった』以上が法隆寺尊殿の本尊の厨子修理にまつわる話である。

帰沢後の安太郎は再び金工家として特に銅鑼の製作に専念することになり，ここに安太郎の生涯の後期が始まる。そして安太郎が金工作家として再び記録に現われるのは，すでに前稿でも述べた，益田純翁から安太郎が厨子修理にたずさわる以前に注文されていた有楽所持五芽三象古銅花入の写しについての『十三松堂日記』の次の記事である。昭和14年11月26日朝　加賀より魚住為楽益田鈍翁委嘱の三象花器を仕上げて出来栄を見せんとして携示す誠に上々の出来なり益田翁生前に見せ得たならはと残念がる。

昭和15年　砂張張１尺６寸鉦　完成す　前田家所蔵　（魚住為楽後援会編「銅鑼」）

昭和15年　砂張１尺６寸鉦　完成す　法隆寺管長　佐伯定胤猊下銘　和鳴　林屋亀次郎氏所蔵
（　〃　〃　）

昭和17年６月17日石川県認定芸術家に認定さる（北国毎日新聞昭和17年６月19日）

昭和20年10月13日より25日まで開催の石川県美術館開館記念をかねた北国毎日新聞社主催「第１回現代美展」に招待出品す（北国毎日新聞昭和20年10月12日）

昭和21年　砂張１尺６寸鉦　完成す　西川外吉

氏所蔵　（魚住為楽後援会編「銅鑼」）

昭和21年砂張１尺６寸鉦　完成す　赤座吉郎氏所蔵（　〃　〃　）

昭和21年11月７日より11日まで開催の石川県美術文化協会・北国新聞社共催美専開校記念「現代美術秋季特別展」に出品す（北国年鑑1948）

昭和22年10月29日　天皇陛下北陸巡幸の際８角銅鑼天覧の光栄を賜う。その模様を同年10月30日付の北国毎日新聞は「ドラを打たれた陛下―御興深げ工芸石川―材料などにもお心づかい」の見出しで次のよむに報じている『工芸の製作状況，同代表作品，輸出向け各種製品など工芸石川が誇る作品のかずかずを県工芸指導所で御覧になっていた陛下が高橋所長から「このドラは約１分間鳴っております」と魚住為楽氏作「８角ドラ」のことをお聞きになると差出したばちを気軽く受けとられて３度打鳴らされた。ゴーンと鳴っていつまでもひく余いんに心もちお顔をかしげてしばし聞き入られた陛下初め２回は打ち方を御存じなかったか中央でなく端の方を打たれたがドラの音には興味をおひかれの御様子だった……自作のドラを陛下にならしていたただき感激した魚住為楽氏は「この８角ドラは自分がドラを作り出してから30年目に初めて出来たもので，丸型でなく角型は角で音が切れるため非常に困難な仕事です，この作品は陛下にぜひみていただこうと９月から仕事をはじめてやっとまにあったものでこの光栄はドラ作り一生の感激です」と語った。』

昭和23年　砂張８角１尺８寸鉦　完成す　法隆寺管長　佐伯定胤猊下銘　和鳴　嵯峨保二氏所蔵　和鳴は法華経中の「宝鈴和鳴」に因めるもの（魚住為楽後援会編「銅鑼」）

昭和24年　市制60周年協賛　石川県美術文化協会　北国毎日新聞社共催「現代美術展」に「砂張８角鉦」を出品し最高賞を受賞す

北国毎日新聞５月１日付に掲載の選後評に内藤春治氏は「最高賞になったドラ（魚住安太郎氏）は模様もなく型からいってもボリュームからも，また音色からも，それが立派に総合され造形化されているのに大きな力を感じた」と評している。

昭和26年７月30日　石川県より安太郎の銅鑼作りの技術を文化財保護委員会へ無形文化財に申請し，31日付の北国新聞は「工芸石川の技術保護，魚住氏のドラ作り等13件申請」の見出しで「文化財保護法により保護が加えられることになり，工芸王国を誇る石川県では無形文化財中とくに工芸技術の保護に中心をおき，高橋県工芸指導所長の手で推薦候補を慎重に検討した結果，つぎの13件を文化財保護委員会へ申請することに30日決定した」として個人技術ドラ作り（魚住安太郎）外２件と一般技術10件を紹介し「このうち個人技術になっているものは当人のもつ技術保存に重点がおかれるもので，これらが文化財保護委員会から正式に認可されれば，個人および団体にたいし保護費が配布される」と報じている。

昭和26年秋　砂張12角１尺５寸鉦「雲竜」一対完成す　柴田三郎氏所蔵

昭和27年１月　銅鑼の技術を無形文化財に指定の内報があり，１月20日付の北国新聞は次のように報じている。

「文化財保護委員会が無形文化財として価値ある工芸技術に保護の道を講ずることになったので，昨年石川県では九谷焼・輪島漆器・友禅染・敷物金工などの部各部門にわたり11件の技術保存を申請していたが，このほど金沢市長町鋳造業魚住安太郎氏（67）の銅鑼の制作技術が唯一のものとして選ばれ同氏のもとに内報があった。

全国からの申請は300余種で，うち30件が保護対象に内定したが中部地方では該当技術は６件。工芸石川県下では魚住氏が初の無形文化財の指定を受けたわけである。指定技術にたいする同委員会の具体的な保護方法はまだ決まっていないが，作品の買上げ，技技術保存のための後継者の優先的養成などが考えられている。

魚住氏の銅鑼は茶室に使用されるもので，同氏は40年間ただひとすじにその制作の道を歩み今日までにつくった数は40個を越え全国的に名工の名が高く昭和22年天皇陛下北陸巡幸のときも８角のドラをお目にかけ，陛下自ら打ち鳴らされてその妙音に聞き入られたこともある。

多角もの銅鑼は音を遮断するためこれに統一をあたえるのに苦心がいるといわれるが，氏は現在尺５の12角もの一対を制作中で，一つは龍，一つは雲と銘して後世に残そうと心魂を傾けており，

すでにひとつは完成し，音の統一に見事成功をおさめたという。

魚住氏談　銅鑼の音は精密機械以上に誤差を許さない。音を耳にして心をしずめ茶の湯のふんいきへぐっと誘いこむといういわば茶の序曲の役割を果すものとせねばならず，その音がどうでるかに苦心がいるわけです。こんど指定の内報を受けたが，多年一すじに精進してきたことが認められたものと思い，うれしく思っています。」

昭和27年11月３日第６回金沢市文化賞(功労賞)を受ける

賞　状

為楽　魚住安太郎殿

銅鑼の制作に精魂を傾けその技術は他の追随を許さぬものがありますここに本市文化財保存選奨委員会の推選によりこれを賞します

昭和27年11月３日　金沢市長　井村重雄

昭和27年11月３日　北国文化賞を受ける

北国文化賞

為楽　魚住安太郎殿

生来音曲に対して極めて鋭敏な感覚を有し青年時代より鳴もの職人として不断の研究を重ねことにドラ製作の技術においてその天分を遺憾なく発揮し本年３月稀有の名工として文化財保存委員会の認めるところとなり無形文化財指定作家に選定されるにいたったよって本年度北国文化賞選定委員会の議を経て同文化賞第23号に登録し記念品を贈りここに表彰する

昭和27年11月３日

財団法人北国文化事業協会長

株式会社　北国新聞社長　　嵯峨保二

北国文化賞受賞者の横顔として昭和27年10月19日付の北国新聞は安太郎を「天衣無縫の作家」の見出しで次のように紹介している。

『名工としてしられる魚住さんがドラの制作をはじめたのは23歳の秋，小松市の生家をでて大阪市内の仏具製造業者のもとで徒定奉公をしていたころ，南蛮渡来のドラを一見しており直感的に自分もドラを作りたいと胸をうたれたからだという。それから67歳の今年まで「記憶にない」ほど多数のドラを師もなく独力でつくってきた。しかし作品として完成したものは300面程度，そのうち自分で満足のできたものは４，50面会心の作は７，８面だろうと金沢市長町５番丁の自宅でかたっている。一昨年は16面もつづけて失敗し無造作に自宅前の工房の庭にうちすてた。「気のすすまない作品はすてねこのようなものです」とも無造作に語る魚住さんは天衣無縫の異色作家としても有名である。財を貯めずに作品を売ってえた金は徹底的にすきな酒にかえる。といった生き方については「物質の欲にくらむとよい作品ができないからだ。つぎつぎとつくるドラは私の子供だ。生命をこめてつくったドラが，どこかで愛されておれば満足」とこともなげにかたづけてきた。帝展にも１回出品したきり，社会的な名誉は不必要としてきた。その間22年10月北陸巡幸中の天皇陛下に１尺５寸の自作ドラをおきかせし，本年３月全国でも特異なその技術が無形文化財として選定され，その製作記録をながく後世に残すことになった。今年３月至難とされた12角ドラ「雲竜」を完成後，目下10角の「阿吽」の制作につとめている

魚住安太郎談　これまで私はドラに余いんの美を追及してきたが，こんごはひと打ちできく者をして悲しみを感じさせる幽玄な音をドラにあたえたいと思っている。』

昭和28年２月砂張10角１尺５寸鉦「阿吽」一対完成す　柴田三郎氏所蔵

「阿吽」の完成について昭和28年６月５日付の北国新聞は「魚住さん苦心の角ドラ，春と秋の響き伝える阿吽成る」の見出しで，『昨年春その技術が無形文化財に指定された郷土の異色あるドラ制作家魚住安太郎氏は昨年８月いらい10角の対のドラ「阿吽」を金沢市長町５番丁の自宅で鋭意制作していたが７ヵ月ぶりでこのほど完成した。昨年３月無形文化財財にドラづくりの技術が指定されてから初の作品であり，至難とされた角型ドラの３部作にピリオドをうつ作として関係者間に注目されている。「阿吽」ともに直径１尺５寸。「阿」は春「吽」は秋の響きを現わし春のそよ風が呼ぶやわらぎの音，秋の静寂が告げるさびの音ふたつの響きがあいまって人生の明暗をかすかに伝えようとするところに制作のねらいがあると魚住氏は次のように語っている。

角型ドラは円型ドラに比して音の調和の表現が

至難とされ，同氏の約100点におよぶ作品のうち角型は昭和22年に制作した和鳴（８角）一昨年秋の雲竜（12角）につぐ３番目の作であり「これで３部作が完成したので角型の制作は阿吽をもって最後としたい。こんどの７ヵ月の制作期間中は文字どおり寝食を忘れる思いだった。私としては40年におよぶドラづくりで満足した数点の作のうちでこの阿吽が最上のものに属しょう。」

昭和28年６月25日　多年の銅鑼製作技術研究に対して石川県より顕彰さる

顕　彰　状

魚住安太郎

多年銅鑼製作技術の研究に心魂を傾けられその技術と作品の芸術上の価値は遠く他の追従を許さないところでありましてさきに特に選ばれて無形文化財に指定せられましたことは我が国美術工芸振興のため寔に慶賀に堪えません，ここに記念品を贈って貴下の栄誉を顕彰します

昭和28年６月25日

石川県知事　　柴野和喜夫

昭和30年１月　重要無形文化財に指定さる

昭和30年１月28日付の北国新聞は「人間文化財決る」の見出しで「昨年７月の文化財保護法改正で重要無形文化財の国家指定制度ができたが，文化財専門審議会第４分科会（工芸，芸能＝会長久保田万太郎氏）は27日その第１回認定を決め文化財保護委員会に答申した。こんど認定されたのは23件30人で，このうち石川県関係でドラの魚住安太郎氏蒔絵の松田権六氏人形の堀柳女さんの３人が含まれている。

この認定は芸術院賞や文化勲章とちがって個人の栄誉表彰ではなく〝技〟を表彰する建前から現に第１線に活躍している人々が選ばれた。この答申は29日の文化財保護委例会にかけられ正式に決定する。

これらの人々は技術が記録され演技や作品の公開，展観，そのときの税金の免除，伝承者の養成援助などが行われ，将来は年金を支給することなども考えられている。

（解説）　重要無形文化財とはその卓越した技術を後世に残すためにつくられた制度で科学的にその技法が説明されなければ認定されない。したがって勘にたよるいわゆる名人芸は重要無形文化財の対象とはならない。あくまでも科学的に説明ができ，後世の人が，その解説資料通り行えばその技術が行えるというものでなければならない。今回は第１回重要無形文化財認定となっているがこれは旧無形文化財と本質的にはなんら変りのないものであるが，従来やゝもすれば技法が無形文化財に選定されているのにかかわらず，その技法の資料提供者といった形の人が無形文化財に選定されたと思いこまれやすかったのをはっきりさせるため法規を改正したのちの第１回認定という意味である。したがって重要無形文化財の意味はドラ作り，人形作りなどという技法が重要無形文化財に指定され，さらにその資料提供者として魚住安太郎，堀柳女氏らが認定されたということになるわけである。だが認定された人々は現在におけるその技法の第一人者であるのはいうまでもない。」と解説している。

また読売新聞は『…25歳から本格的にドラ製作に専念した。…アズキをドラのふちにぶらさげて揺れる工合からドラの音色は十文字に振動することによって出ることを発見したのもそのころ，自慢する〝カン〟に頼らず研究と努力を重ね念心の作ができるまでは一つのドラに３年間もとりくむという努力型だ。いま40年余年間の労苦がむくいられた魚住さんは「これまでつくったものでは直径１尺８寸ものがいちばん大きかったが，こんどの指定を記念して，何年かかるかわからないが２尺の大作をつくるつもりだ」と語った。長男は太平洋戦争で戦死，孫安彦（17）君に技術を伝え，文書に残せない生きた記録としたいというのが老名工の悲願である。』と報じている。

工第17号

認　定　書

魚住安太郎殿（魚住為楽）

明治19年12月20日生

文化財保護法第56条の３の規定によりあなたを重要無形文化財銅鑼の保持者の一人として認定します

昭和30年２月15日

文化財保護委員会　委員長　高橋誠一郎

昭和33年10月　富山県で開催の国体にご出席中

の天皇，皇后陛下が22日より能登，金沢を視察行の折，砂張「ドラ」を展覧し石川県の献上品に選ばれる。

当時の模様を昭和33年10月21日付の北国新聞は『ご来県される天皇，皇后さまに差し上げる石川県の献上品が20日決まった。献上品は人間国宝，魚住安太郎氏の「砂張ドラ」…魚住安太郎氏のドラは，径30センチのものだが「これ以上のものは，もう作れないと思うくらいの最高のでき」という。制作にかかったのは9月末「工場にはシメナワは張らなかったが，心のシメナワを張って全魂を打ち込んだ。22年に天皇さまがいらっしゃったときは，私のドラをお打ち下され，こんどは献上の光栄を受けた。この感激がドラにこもっている」と大変な打ち込みよう。19日に完成し，20日には箱書もすんでほっとした表情だ。』

また昭和33年10月25日付の北国新聞には『…魚住安太郎氏のドラの前では作者の「ドラと申しますと船出のジャンジャンの音を考えやすいのですがそれはへそがないためです」と説明すると，皇后さまはいかにもおかしそうに表情をくずされ「ドラは鳴物ですから一つ打って下さい。下からこういうふうに…」とドラばちを手に打つかっこうをおみせすると，おふたかたは大きな声でお笑いになった。もう1度「どうぞ」と魚住氏がうながすようにおすすめすると，天皇さまは左足をぐっと引いて一つ打たれ，ばちを皇后さまにお渡しになった。しかし皇后さまは大きく笑い声をたてられなかなかお打ちにならない。構えられるがこみあげてくる笑いにさからえず大きく前かがみに笑われる。ようやく構えられてお打ちになったが笑いのためヘソの下をたたいて失敗。2度目は「ボーン」といい音が出て皇后さまは大喜び。「けっこうでした」の魚住氏の話でおふたかたは大きく笑いこけられた。』と報じている。

感　謝　状

1尺丸型鉦　　魚住為楽殿

昭和33年10月25日天皇，皇后両陛下の御来県に際し開催した石川県美術工芸展に出品せられたことにつき深く感謝の意を表します

昭和33年11月3日

石川県知事　田谷充実

昭和34年　砂張1尺6寸鉦　完成す　武田和敬翁銘　和　　武田長兵衛氏所蔵　（魚住為楽後援会編「銅鑼」）

昭和34年　砂張1尺6寸鑼　完成す　森本寛三郎氏所蔵（魚住為楽後援会編「銅鑼」）

昭和37年　第2回石川県産業工芸展に出品し，知事賞，優秀賞を受賞す

賞　　状

石川県知事賞　優秀賞

魚住為楽殿

右は第2回石川県産業工芸展において審査の結果その成績が極めて優秀であったのでここにこれを賞します

昭和37年7月3日

石川県知事　田谷充実

昭和37年10月石川県より顕彰さる

顕　彰　状

魚住安太郎殿

貴台は永年にわたり銅鑼製作の技術に精励せられ郷土工芸の名を高揚し本県の工芸文化の向上に多大の貢献をなさいました事は県民の誇りであります

依って茲に県政90周年の式典に当りその御功績を顕彰いたします

昭和37年10月17日

石川県知事　田谷充実

昭和37年10月5日　石川県美術館に砂張三象花入を寄贈し，10月6日付の新聞は次の様に報じている。

『…高さ約30センチ，直径約12・5センチ，3方にキバをもったゾウの頭を配し，砂張銅で製作された作品で，こまやかな磨きがかかり，しぶい色合い。

作品は18年から構想をねっていた失先，ひとりむすこの幸兵さんが戦争でなくなり失意のドン底にあったとき，幸兵さんの友人が力づけてくれた感謝のしるしにと23年8月から5か月間かかってつくりあげ，実費同様の値でその友人にゆずったのを，35年，ふたたび当時の12倍の値で買いもどしたといういわわくがついている。

寄贈の動機はことし数え年で喜寿の祝いを迎えたこと，まごの安彦さん（25）がことし日本伝

統工芸展に文化財保護委員会賞を受賞するほど一人前になったことなど，おめでたいことがかさなったため，県制90周年を記念して県に贈った。

魚住さんは「いま千万円出すからつくってくれといわれても，とうていつくれない。仕上げのヤスリだけでも50本は使った。神のたすけがあったからだろう」といい，また高橋勇美術館長は「ロウ型に流しての熱処理が大変な仕事なのに，一つのつぎ目もないのが名作といえよう。将来は重要文化財にも指定されるほどの作品だ」とほめていた。』と報じ，また同日付朝日新聞は「魚住さんはこの花人れを前にして，前日には2人の孫に秘伝を伝え肩の荷をおろしたと」伝えている。

感　謝　状

魚住安太郎殿

砂張三象花入

石川県政90周年を記念して右の品を本県へ御寄附になりました石川県美術館に鄭重に保管し名品の美をながく後世に伝えますここに深甚の謝意を表します。

昭和37年12月18日

石川県知事　田谷充実

昭和39年5月22日金沢市立病院に入院，胃ガンと診断され，「まだ仕事が残っている」と必死の闘病生活が続けられたが，病状は好転せず，新盆の日の同年7月15日午後2時45分，永眠した。

昭和39年7月16日付の北国新聞は「ドラ一筋の50余年いまは亡き魚住さん」の見出しで『ドラづくりの〝人間国宝〟魚住安太郎さん（77）は15日午後2時45分，金沢市立病院の一室で，ドラづくりひとすじに打ち込んだ生涯を閉じた。くしくもお盆の15日が命日となった。むし暑いツユの曇り空がのぞく市立病院5階の特別室。その特有の大きな耳，深いシワ，大きな手，真一文字に結ばれた口元には芸術に生きた人の穏かながらきびしい面影があった。「静かな住生でした」とつきそいの長男（故人）の妻綾さん。「2，3，日前〝仕事の夢をみた〟と話しておられました」と同病院の医師たちが語っていた。

魚住さんは昨年末から胃の調子が悪くなっていたようだ。ドラは心で作る，無垢な心でなければよいものはつくれないといい，気のすむまで酒をのみ，散財もした魚住さんが，昨年末ぶっつり酒をやめた。

「いい仕事を残す命がほしくなった」と元気に話していたが，まもなく健康がすぐれず，床にふす日が多くなった。さる5月22日同病院に入院，胃ガンと診断されたが驚く表情はなく，付き添い人なしで淡々とした日々だったという。

しかし暑さと湿気の波状攻撃に10日すぎから急に体力が衰え，14日夕食の牛乳と卵を最後の食事に腹水が急激にふえて重体に陥った…。』また主治医であった杉林篤之氏は手紙で次の様に言っておられる。

『為楽魚住安太郎氏は昭和39年7月15日午後2時45分，癌性腹膜炎で永眠されましたが，同年5月下旬より，ご臨終までの診療とお世話をしたと言うより，幾多の教訓を賜はった翁の最後の模様を綴っておきます。

出　逢

私は数多くの方々にお逢いしたが，今日もなお鮮烈に心に遺っている方達の内のお一人が為楽翁です。

翁との出逢いは昭和39年5月下旬「胃癌による貧血のためか，どうも体力が衰え，元気がなくなりました。宜敷くたのんます。」と〝胃癌〟と言う言葉を，気負った様子もなく，痩我慢でもなく生死を超越した境地で淡々と語られたことに始まります。

翁に〝為楽〟の号は，もしや仏典からでは？とたづねたら―諸行無常，是生滅法，生滅滅己，寂滅為楽，（涅槃経第144句偈）―はたと膝をうち「よく解っていただけましたネ，これは三井家の益田男爵から頂いたものです。」と当時の憶い出をお話しになり尺6鉦を製作されたいきさつを綴った直筆の貴重な原稿をいただきました。

天衣無縫

かつて両陛下が金沢市においでの際，皇后さまが，翁の鉦を叩かれたが，よい音調が出ないのでドラの打方を翁らしい説明で，「臍の下を斜め上へ打上げるような気持で打って下さい」に皇后さまは抱腹高笑いされた。

お付添いの一同も緊張より解かれ和やかな気分があたりに満ち溢れた。後日，県の役人より「無礼な…」「下品な…」と注意されたが，君等は何と小心者よ，皇后さまのあの大笑いの録音を放送したならば，（氏はこの録音テープをお持ちと承ったように思う）庶民はさらに皇室に親しさを増すものを，と言ってやったと笑われたあたり，翁の媚びず，へつらわぬ野人の面目が躍如としてうかがえます。

悟　境

燃えるような意慾，命のある限りは仕事をとの気迫に溢れものの考え方も進歩的であり，憶い出話も老人の陰湿なくりごとではなく，将来に関する内容のもので，つねに明日を，未来をみつめて希望をもち理想に向って精進しておられたと思います。

「運のよい，そんなものはない，運は自分で招くものだ」とも訓されましたが，日常生活は寝ても覚めても，絶えず工夫努力の積み重ねで，道の奥義に到達された翁にして始めて言える言葉であります。

死病にとりつかれた病人にありがちな，診療に対しての注文，不満はなく非観的な考え方は少しもなく（38年秋本人に胃癌と言われたらしい）また癌性腹膜炎末期で腹水がたまり苦痛も甚しかったと思われるが，苦痛らしい苦しみも訴えず，これからの仕事の計画とか，「もう少し体力が充実すれば，京の千家へ納める２尺のドラをつくらねばならん準備は出来ているんだが」とか，私が拓本に興味があり石地蔵さんの立体的な拓本をやってみたいと話しますと，「私が癒ったら一緒に鎌倉のチョボ光台へゆくまいか，あそこはうってつけのものがたんとあるぜ」と翁が以前に研究された拓本とりの秘訣（自家製墨のつくり方，紙の選び方，水，刷毛その他）を教授されました。

１日に何回も注射をしたので「痛い？」と聞くと「医者は信念をもってやらにゃ，人間は自分のやることに自信をもってやらねば」と逆に励やされました。

印象寸描

無慾恬淡「無」の世界を更に通り越した無限の広い境界に生きた人，誠実さ，鍛えに鍛え，修業の累積の結果で，硬苦しさ，無理や態とらしさを思わせる雰囲気はなかった。

感謝，何ごとにも心から悦び感謝しておられた

忍耐，ジーッと歯を噛いしばって我慢して歩んで来た生涯の結露である堪忍の尊さを教え「先生，何事もしんぼうですぞ，かん忍しなさいや」と訓された。

誇，自分の芸術に対し，自分の過去，現在，将来への道に，おごりたかぶった自尊心と言う匂いでなく，信念で芸術に生き抜いた〝誇〟があった「唯我独尊」の境地にあった方にも同一次元におられたと思う。純情で涙もろい反面硬骨，豪放磊落。

非　銭　奴

良心的で，いい加減さ，なれ合い，売名名利を極端に嫌い時には家庭の経済を忘れて仕事に没頭したいわゆる名人気質昔かたぎの最後の人。

寂滅為楽

死去されるまでの１週間あまりの間の言行の二・三を収録しますと，

７月５日

〝病状重篤〟で家族，親戚が枕もとに集った時「お前等，何しに来た，わしはまだまだ死ねんいや死にやせん，臨終はまだまだ，帰れ帰れ，呼ぶまで来ていらんよ，」

７月11日　絶筆

入院中も作品の箱，あるいは書きものを頼まれると「病室で書いては申し訳けない」と自宅の仕事場まで帰って書いておられたが，７月11日午後「杉林先生に差上げる箱書は体がえらくて，とても宅え帰れ相もないから，病室で大変失礼だが此処で書かせて頂く」と律義に何回もあやまって起坐呼吸をしながらも正座をして「砂張風鈴」蓋裏に「為楽」と署名され，「最后の傑作中の傑作」と自称される風鈴を収め，静かに筆をおき，どうと横だおしに臥られたがこれが文字通り絶筆となった。

７月14日

死の前日であったが夢と現実の区別が判っきりしていた。めい目していた瞼を静かに開け「今夢でお宮さんにお詣りしていた」とか「今日は何々と誰々の会合（仕事上の）があったはずだが…」と記憶もしっかりしていた，夕刻は最后の言葉として，「仕事場の……」とあとは唇が微かに動いただけで言葉にならなかった。

7月15日

朝，枕もとにいた誰かが「もうだめか」とつぶやいたら顔を横に振り，声にはならなかったが「まだまだ」と言っているようなゼェスチュアに思えた。

午後2時15分，悩み，苦痛を超えた安らかな大往生であった。死顔も綺麗で立派であった。』

昭和37年7月15日叙勲を賜わる

日本国天皇は魚住安太郎を勲4等に叙し旭日小綬章を授与する昭和39年7月15日葉山において璽を捺させる

大日本国璽

昭和39年7月15日

内閣総理大臣　　池田勇人

総理府賞勲局長　岩倉規夫

第 3215302号

昭和39年7月16日付北国新聞は『金沢市は15日死去した重要無形文化財，魚住安太郎氏に〝景仰の証〟を贈ることを決め，17日に東別院で行なわれる告別式に徳田市長が持参し，〝人間国宝〟の霊前にささげる。

景仰の証は生前に同市の文化賞を受けた故人に贈り，その功績を市の功労者名鑑に記載するもので同氏は昭和27年11月7日に「すぐれたドラの作家」として文化賞を受賞している。』と報じている。

景仰の証

故魚住安太郎殿

銅鑼の製作に秀で当代稀有の名匠として昭和27年金沢市文化賞を受けられましたここに御逝去にあたり金沢市文化功労者名鑑に御芳名を登載して永くその栄誉を遺し御功績を讃えます

昭和39年7月17日

金沢市

告別式の模様を北国新聞は「遺作のドラ鳴り響き魚住さんの告別式」の見出しで『ドラづくりに生涯をささげ，惜しまれてこの世を去った「人間国宝」故魚住安太郎氏の告別式は17日午前10時から金沢市横安江町東別院仮本堂で行なわれた。

告別式には中西県知事をはじめ徳田金沢市長…ら500余人が参列して生前の故人の多彩な交際をしのばせてしめやかに営まれた。

式は高橋勇葬儀委員長（県美術館長）の故人をしのぶあいさつではじまり故人の晩年の遺作といわれる“尺2寸”のドラが大小2つ院内に響きわたり，参列者たちはめい福を祈って深い黙とうをささげて，ドラづくりに生涯をかけた故人をしのんだ。

つづいて徳田金沢市長から13人目「景仰の証」を仏前に供え中西知事や宮下県美術文化協会長らがつぎつぎに立って弔辞を読みあげると遺族の安彦氏（27）茂子さん（24）幸雄（23）の目にも涙がみえた。最後に故人のもっとも親しかった茶人の越田外茂次さんの打送りのドラの音とともにひつぎが送り出された』と報じている。

法名を「梵声院釈為楽」といい，金沢市の郊外の野田墓地に葬らる。

今日は銅鑼　明日は酒だと五十年　為楽

（未完）